

○仲田 奈生¹⁾，山本 真理子²⁾

1) YMCA 米子医療福祉専門学校 作業療法士科 2) 島根リハビリテーション学院 作業療法学科

Keywords: 生きがい，感情，地域在住高齢者，社会的孤立

【はじめに】

生きがいとは，感情と価値観を含む日本人特有の幸福感の概念とされており，well-being の促進に関心をもつ作業療法士にとって重要な指標となる．この生きがいと高齢者の社会的孤立について関心を寄せる出来事があった．それは，授業で地域を訪れた際に孤立状態にある高齢者から「生きがいがない」という発言を耳にすることが幾度とあったことである．この経験から社会的孤立にある高齢者への生きがい支援の必要性を感じた．

本研究の目的は，地域在住高齢者の社会的孤立の有無と生きがいとの関連を明らかにすることである．

【対象と方法】

島根県奥出雲町在住の 65 歳以上の高齢者を対象にアンケートを実施し，有効回答が得られた 310 名を分析対象とした．書面にて研究の趣旨について説明を行い，参加の同意を得た．研究実施にあたり，島根リハビリテーション学院倫理審査委員会の承認を得ている．

対象者に年齢，性別，家族および友人関係におけるソーシャルサポートの状況，生きがいを感じている精神状態の評価項目が記載されたアンケートを配布した．家族および友人関係におけるソーシャルサポートの状況の評価には，日本語版 LSNS-6 を使用した．家族および友人関係のネットワークに関する合計 6 項目について，6 件法でネットワークの人数を回答するものである．得点範囲は 0 点～30 点で，得点が高い方がソーシャルネットワークは大きく，12 点未満は社会的孤立を意味するものとされている．生きがいを感じている精神状態の評価には，Ikigai-9 を使用した．9 項目による自己記入式の質問紙であり，「とてもあてはまる」から「ほとんどあてはまらない」を 1～5 点の 5 段階で評価する．各素点を合計し，総得点 (9～45 点) および下位尺度得点 (範囲 3～15 点) を算出する．下位尺度は，Ⅰ：「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」，Ⅱ：「未来に対する積極的・肯定的姿勢」，Ⅲ：「自己存在の意味の認識」の 3 つから構成され，得点が高いほど生きがい意識が良好であることを意味する．

統計学的処理には SPSS (Ver.26) を使用した．日本語版 LSNS-6 の得点の 12 点以上を非社会的孤立群，12 点未満を社会的孤立群とし 2 群に分けた．2 群間の比較には，性別は χ^2 検定，正規分布する項目は対応のない t 検定，正規分布しない項目は Mann-Whitney の U 検定を用いた．その後，社会的孤立の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析を用い比較・検討を行った．それぞれの有意水準は 5% 未満とした．

【結果】

社会的孤立群の平均年齢は 74.8 ± 6.6 歳 (男性 33 名，女性 33 名)，非社会的孤立群は 74.4 ± 6.0 歳 (男性 108 名，女性 136 名) であり，両群間に統計学的有意差は認められなかった．Ikigai-9 においては，総得点および下位尺度全ての項目において，両群間に統計学的有意差を認めた ($p < 0.01$)．有意差のみられた Ikigai-9 の全ての項目を独立変数，非社会的孤立群・社会的孤立群を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った結果，独立した有意な変数として選択されたのは下位尺度の「生活・人生に対する楽観的・肯定的感情」であった ($p < 0.05$)．

【考察】

結果より，社会的孤立にある高齢者は現状の生活・人生に対して楽観的で肯定的な感情を感じられていない可能性が示唆された．先行研究より，生きがいの現状に対する感情の側面を高めるには，余暇活動に焦点を当てることが効果的であるとされている (今井 2016)．前回大会において，社会的孤立にある高齢者は余暇活動への参加が阻害されている可能性があることを報告した．これらのことより，社会的孤立状況にある高齢者に対して，余暇活動への支援を行うことが，楽しみのための活動となり，生きがいの現状に対する感情の側面を高める可能性があると考えられる．